様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１３６

研究課題名（和文）ウェールズ英語文学研究の基盤創設に向けて―二十世紀小説を中心に

研究課題名（英文）Laying Foundation for the Studies of Welsh Writing in English: Twentieth-Century Fiction and Beyond

研究代表者
河野　真太郎（KONO, Shintaro）

一橋大学・大学院商学研究科・准教授

研究者番号：３０４１１１０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本ではほぼ行われることのなかった20世紀のウェールズ英語文学の基礎研究である。本研究では、20世紀ウェールズ作家の作品の基本的な検討に始まって、とりわけレイモンド・ウィリアムズやエミール・ハンフリーズといった作家については、イングランドのヴァージニア・ウルフ、日本の夏目漱石や村上春樹といった作家との比較を論文および学会発表という形で成果発表した。この他にルイス・ジョーンズ、カラドック・エヴァンス、マージアッド・エヴァンズ、B. L. クームズ、リース・デイヴィスといった作家についても基礎研究を行った。

研究成果の概要（英文）：This project aims at carrying out basic studies on Welsh literature in English, which has been all but ignored in Japan. This project began as a basic investigation into 20th-century writers in Wales, and especially about writers like Raymond Williams and Emyr Humphreys, comparative studies with Virginia Woolf, Soseki Natsume, and Haruki Murakami have been carried out and the results of the studies have been published in the forms of journal articles and oral presentations at academic conferences. Other writers for the investigation included Lewis Jones, Caradoc Evans, Margiad Evans, B. L. Coombs, and Rhys Davies.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：イギリス文学　ウェールズ文学　英語文学　比較文学　小説研究　20世紀

１．研究開始当初の背景

イギリス（ウェールズ）においては、ウェールズ語文学のほかに、ウェールズ英語文学(Welsh writing in English)がひとつの確立された分野として、豊富な作品が生みだされるとともに、その研究も進んできた。たとえば、ウェルシュ・アセンブリ（ウェールズ自治議会）の文化政策の一環として出版されているウェールズ文庫（the Library of Wales）に所収の作品だけを見ても、その豊富さを垣間見ることができる。研究面についても、上記の文庫を編集しているダイ・スミス（Dai Smith）や、彼の所属するスウォンジー大学のウェールズ英語文学・言語研究センター（CREW）によって、かなり組織的な研究がすすめられている。それに対し、日本においては、翻訳や研究といった形での、特に近代のウェールズ英語文学の紹介はほとんど進んでいないのが実情である。これまでのウェールズ文学研究は、ケルト系文化圏の研究の一環として、アイルランド文学やスコットランド文学に従属する形でなされる傾向にあった。したがってそこからは、特に近代以降のウェールズの産業化・近代化の実情に向かう視点が欠落している。20 世紀のウェールズ小説は、炭坑を中心とする産業化および（サッチャー政権以降の）脱産業化の歴史と切り離せないが、上記のような研究からはそれはこぼれ落ちてしまっている。

研究代表者は、ウェールズ出身の批評家・小説家であるレイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）研究に端を発して、ウェールズ英語文学の豊饒な世界とその研究の意義に気づいた。ウィリアムズは批評家であるとともに小説家であり、研究代表者はこれまでウィリアムズについての研究を発表しているが、そのウィリアムズが『田舎と都会』や小説『ボーダー・カントリー（辺境）』で示しているように、ウェールズは炭坑業や鉄鋼業といったイギリスの近代化の最先端を担いながら、文化的にはイングランドの後背地となってきており、近代の矛盾を体現する非常に重要な地域である。遅れて近代に参入し、急激な産業化と脱産業化を経験した日本にとっても、ウェールズは近しい存在であり、日本にウェールズ文学を紹介することは意義深い。本研究は、これまでのウィリアムズ研究の結果を軸に、それをさらに発展させる形で、ウェールズ文学研究の基礎を築くことをめざした。

２．研究の目的

本研究は、日本ではこれまで紹介されることの少なかった、ウェールズ英語文学(Welsh writing in English)研究の基礎を築くことを目的とした。ウェールズ英語文学は、ウェールズにおける文学研究では確立された分野であり、英語で書かれたウェールズ文学の遺産は豊富なものであるにもかかわらず、日本での知名度ははなはだ低い。本研究は、特に 20 世紀の小説（Gwyn Thomas, Alun Richards, Raymond Williams, Jack Jones を中心に、ほか多数）に焦点を当て、研究の基礎を築くとともに、ウェールズの研究者との学術交流も進めることを目的とした。

３．研究の方法

本研究の研究方法は四種類に大別される。（１）国内での一次・二次文献研究、（２）国内外での研究会・学会活動、（３）国外での一次文献調査、（４）国外での研究者との情報交換である。（１）については、文学作品そのものと、研究書の文献収集とその検討である。文献の購入を中心として、順調に必要な資料を収集した。（２）については、研究結果を世に問い、フィードバックを得ることによって研究の方向性を定めるために必要である。研究期間中には国の内外を問わず、ウェールズの研究者からの研究発表への反応は非常に有益なものであった。（３）については、ウェールズのスウォンジー大学所蔵の、Raymond Williams および Alun Richards の手稿アーカイヴの調査である。これについては、研究代表者の健康問題もあって予定していたほどには調査を行うことができなかったが、平成２７年９月よりスウォンジー大学の訪問研究員として滞在するため、本研究課題での調査を基礎として、さらに調査を行う予定である。（４）については、スウォンジー大学の研究者（Dai Smith, Daniel Williams など）との学術交流を継続した。本研究の目的を達成するためには、ウェールズにおける研究状況を知悉しておく必要があるため、学会・セミナーなどの学術交流を進めた。

４．研究成果

本研究は、ウェールズ英語文学研究の基礎を固めることを目的とするため、基本的な文献・資料研究をすることを予定していたが、結果、その予定を大きく超えて、書籍や論文・学会発表という形での成果発表を行うことができた。とりわけ、レイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）研究と、ウェールズ作家のエミール・ハンフリーズ（Emyr Humphreys）について、成果を発表することができた。

まず、研究代表者が編者でもあった書籍『愛と戦いのイギリス文化史――1951-2010 年』において、「序章 2　文化とは何か――20 世紀後半イギリスの文化と社会」と、第 20 章「イギリスの解体――ウェールズ、炭坑、新自由主義」を執筆した。前者は直接にウェールズ文学を扱うものではないが、ウェールズ出身の作家・批評家であるレイモンド・ウィリアムズの著作に大きく依拠する形で「文化」をめぐるメタ思考の系譜について考察した。後者は本研究課題の基本的な枠組みを示

す重要な論文である。この論文では、ウェールズに歴史的に付与されてきた相矛盾するイメージ、つまり田園的なウェールズと産業化されたウェールズのイメージが文学・文化的に表象されてきたことを指摘しつつ、最終的にはウェールズがイギリス全体の近代化において重要な役割を果たす産業地域でありながら、文化的には後背地におしやられてきた事情を考察した。

また "Soseki Natsume, Raymond Williams, and the Geography of 'Culture'" （雑誌論文②）は、イギリスのレイモンド・ウィリアムズ学会の機関誌（査読誌）に掲載された。この論文では、レイモンド・ウィリアムズの批評的著作と小説の双方を含む著作の全体が、彼のウェールズからイングランドへの移動の経験を基礎に考えられるべきものであることを論じ、さらにはその地理的かつ文化的な移動が、ウェールズ、さらにはウィリアムズに限定されるものではなく、近代そのものに典型的な移動の形態であることを証明するために、日本から夏目漱石の『三四郎』を取り上げた。『三四郎』の主人公は熊本から東京へと移動するが、その鉄道での移動は単なる地理的な移動というだけではなく、教養や文化の中心への移動であるとともに、さらには西洋というその向こう側の中心をめざす移動である。このような、差異をともないながらも相同的な移動の経験が、近代の経験の基底にあることをこの論文は論じ、査読者からも高い評価を得た。

論文「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？――「世代問題」と文化と社会の分離」は、直接にウェールズ文学を扱う論文ではなく、フェミニズムとマルクス主義（または労働者階級文学）において、世代の断絶が文化的なものと社会的なものの分断と軌を一にして生じていることを指摘するにあたって、レイモンド・ウィリアムズの思想を基礎においた論文である。

学会発表「成長と文学」も同様に、ウェールズ文学そのものを扱うものではなく、レイモンド・ウィリアムズにおいて重要な「成長」という主題を基礎理論的に考察したものである。レイモンド・ウィリアムズにとって、人間の成長の観念が、19 世紀から 20 世紀にかけて「個人化」していったことは重大な問題であった。本発表ではジェド・エスティ（Jed Esty）の議論を援用してそのような成長の観念の変化を歴史的に検討することを目指したが、この基礎的考察は、上記の論文（「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？」）と、後述する学会発表（“Sons and Friends”（学会発表②）および“Beyond Developmental Narratives”（学会発表①））にとって非常に重要な洞察を与えることになった。

"Exile, Vagrancy, and Cosmopolitan Citizenship?: The Cases of Williams and Said"（学会発表③）は、レイモンド・ウィリアムズと、アメリカの批評家であるエドワード・サイード（Edward W. Said）の比較研究である。エドワード・サイードはパレスチナ出身で、エジプトを経てアメリカで批評家・知識人として活躍するという、一種の亡命者知識人であった。その個人的経験は、ポストコロニアル理論と総称されるサイードの仕事にとって非常に重要なものであった。しかしそういった移動性は、グローバル化の進んだ現代におけるポストモダンな市民性の概念へと奪用されがちである。その点を検討するために、この発表では、レイモンド・ウィリアムズが論じた亡命状態（exile）と放浪生活（vagrancy）との差異に注目し、前者は単に社会やコミュニティから離脱することではなく、離脱することによってその社会に変化を加える可能性と視座を手にすることであると論じた。

"Sons and Friends: Emyr Humphreys and the Novels of Growth in the 1950s"（学会発表②）と "Beyond 'Developmental Narratives': Virginia Woolf, Emyr Humphreys, and Haruki Murakami"（学会発表①）は、かなり内容が重複する。これは、ひとつには前者が日本において英語で行われた学会で、そして後者はウェールズ英語文学会の年次大会で発表されたものであり、聴衆の質がことなるために、活字化（論文化）を目指すにあたっては原稿の書き直しを必要としたこと、そして後者は学会が行われる約 2 ヵ月前という形で、準備期間がかなり限られていたという事情もある。ともかくも、上記の二つの学会発表についてはここでは一体のものとして報告する。本発表は、ウェールズの英語作家エミール・ハンフリーズ（Emyr Humphreys）、イングランドのモダニズム作家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf）そして日本の作家村上春樹の作品を比較するものである。作品はそれぞれ、*A Toy Epic*, *To the Lighthouse*, そして『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』である。これらの、地域も時代も異にする作品の共通点は、主人公たちが青年期まで形成していた地元の親密な友人関係から離脱していくというそのプロットである。しかしこれらの共通点は、その差異において読まれなければならず、その差異が明らかにするのはこれらの作品の歴史的差異なのである。具体的には、ウルフの作品は帝国の中心イングランドと、遠い植民地という地理的想像力を基礎としているのに対して、村上春樹は現代のグローバル化時代の、均質的な空間の観念を基礎とする。これらの地理的想像力の違いは、地理的移動の上に重ねられる登場人物たちの「成長」観に違いをもたらさずにはいない。その観点からすると、前者二人と比較した際のエミール・ハンフリーズの特殊性は際だっている。前者二人が地理的外部性（植民地やグローバルな非・場所）に解決を求める一方で、近代のいわば後背地の作家ハンフリーズに

はそのような外部性は与えられていない。ハンフリーズの独特のリアリズムはそこから生じている。

なお、最後の研究発表（"Beyond 'Developmental Narratives': Virginia Woolf, Emyr Humphreys, and Haruki Murakami"）を行ったのはウェールズ英語文学協会（The Association for Welsh Writing in English）の年次大会のパネルにおいてであり、パネル自体はレイモンド・ウィリアムズと「田舎と都会」をテーマとし、スウォンジー大学のダニエル・ウィリアムズ教授が組織したものであった。この年次大会は三日間にわたって行われるもので、それに通して参加することで、研究代表者にはウェールズ文学をめぐる相当の知見がもたらされて有意義であった。

以上、論文および学会発表という形で結果を公表した研究以外にも、作品の検討や新たな研究者との交流が進捗した。

特筆すべきはニュージーランドのウェリントン・ヴィクトリア大学のドゥーガル・マクニール（Dougal McNeill）との研究交流である。同氏は平成２６年９月に来日している。ドゥーガル・マクニールはケンブリッジ大学出版局から批評的な文学史のシリーズの一冊（*British Literature in Transition*）を編集して出版する予定であるが、氏の依頼により、本研究代表者はそのうちのウェールズ文学の章を執筆することになっている。その本は１９２０年代から１９４０年代のイギリス文学を対象とするものであるが、研究代表者は、ウェールズ・ナショナリズムが興隆したこの時代の「ウェールズ・アイデンティティ」と、南ウェールズの炭坑労働者階級との関係を主題として寄稿をする予定であり、その執筆に向けて研究を進捗させた。具体的にはルイス・ジョーンズ（Lewis Jones）、カラドック・エヴァンズ（Caradoc Evans）、マージアッド・エヴァンズ（Margiad Evans）、リース・デイヴィス（Rhys Davis）、B. L. クームズ（B. L. Coombs）、ディラン・トマス（Dylan Thomas）といった作家についての研究を進めた。この研究については、研究期間内に結果を発表することはできなかったが、上記の British Literature in Transition は、締め切りが平成２７年９月で、平成２８年または２９年には出版される見込みである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①河野真太郎「おれたちと私たちはいかにして貧しさを失ったのか？――「世代問題」と文化と社会の分離」一橋大学言語社会研究科紀要『言語社会』7（2013 年 3 月）：151-164．査読なし

②Shintaro Kono. "Soseki Natsume, Raymond Williams, and the Geography of 'Culture.'" *Key Words* 9 (2011): 83-99.査読あり

〔学会発表〕（計４件）

①Shintaro Kono. "Beyond 'Developmental Narratives': Virginia Woolf, Emyr Humphreys, and Haruki Murakami." The Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English. 28th Mar. 2015. Gregynog Hall, Wales, UK.

②Shintaro Kono. "Sons and Friends: Emyr Humphreys and the Novels of Growth in the 1950s." Culture as a Whole Complex: (Re)Action to Industrialism and Lessez-Faire, Raymond Williams in Transit IV. 16th Mar. 2014. Japan Women's University (Mejiro, Tokyo).

③Shintaro Kono. "Exile, Vagrancy, and Cosmopolitan Citizenship?: The Cases of Williams and Said." "Raymond Williams and Edward Said" Workshop. 11th Jan. 2014. Hitotsubashi University (Kunitachi, Tokyo).

④河野真太郎「成長と文学」日本ヴァージニア・ウルフ協会第 32 回全国大会（2012 年 11 月 18 日、関西学院大学、兵庫県西宮市）

〔図書〕（計１件）

①川端康雄・大貫隆史・河野真太郎・佐藤元状・秦邦生編著『愛と戦いのイギリス文化史――1951-2010 年』慶應義塾大学出版局、2011 年。478 頁（19-34, 351-365）

６．研究組織

(1) 研究代表者

河野 真太郎（KONO, Shintaro）
一橋大学・大学院商学研究科・准教授
研究者番号：３０４１１１０１